

## 26th Congress of the World Association for Sexual Health (WAS) 報告

### 包括的セクシャリティ教育に関する発表について

筑波大学名誉教授・全国性教育研究団体連絡協議会理事長 野津 有司  
宇都宮大学准教授・とちぎ学校保健性教育研究会代表 久保 元芳

第26回性の健康世界大会が2023年11月2日～5日にトルコ共和国の南西部アンタルヤにて開催されました。

今大会のメインテーマは“Bridging the Gaps: Sexual Health, Rights, Justice, and Pleasure for All!”（ギャップを埋める：性の健康、権利、公正、そして喜びをすべての人に！）で、62カ国の約500人の参加がありました。私たちは、諸外国の包括的セクシャリティ教育（CSE: Comprehensive Sexuality Education）について特に注目して参加し、最新の情報を若干収集したので、その一部を報告します。

まず、このWASの主な活動として、「世界大会の開催（隔年）」「性の健康、権利、公正、喜びに関する政策立案と基準設定への貢献」「セクシュアリティに関する研究の推進と紹介」「性的健康の業務従事者の専門的能力の強化」「包括的セクシャリティ教育（CSE）の支援、推進」の5項目が掲げられており、また今大会は新型コロナ感染拡大の影響により4年ぶりの対面開催でもあることから、CSEに関する貴重な発表が聞けるものと期待されました。

報告された研究成果を概観すると、各国・地域におけるCSEの実践、普及の難しさを指摘するものやこれからの取組に向けた重い課題を挙げるものが目立っていました。すなわち、総じてCSEの推進や成果は十分ではなく、厳しい状況に留まっている現状にあるという印象でした。

次に、特に注目される発表をいくつか紹介します。

●招待講演「学校を基盤としたセクシュアリティ教育を推進するために、グローバル・サウスから得た教訓」ヴェンカトラマン・チャンドラ・ムーリ氏（WHO、性と生殖に関する健康リサーチ、インド）

包括的セクシャリティ教育（CSE）は、その必要性が認識され、それが権利であると認められてきていると思われる。また、CSEの有効性と費用対効果に関する証拠があり、そのプログラムの提案・計画・モニタリング・評価のツールも利用可能である。さらに、国際的な宣言や国・地域の行動計画にCSEが盛り込まれつつあるにもかかわらず、学校を基盤としたCSEの実施における進展にはかなりばらつきが見られ、十分でない状況であると言わざるを得ない。

そうした中で、一部の低中所得国（LMIC: インド、パキスタン、ナイジェリア、セネガル、メキシコ、ウルグアイ）では、CSEプログラムの規模が拡大され、維持・強化されていることに注目し、その要因を分析した結果、次のことが分かった。①これらの国では、明らかにセクシュアリティ教育（SE）が政治的に優先事項となっていた、②国際的なアドボカシーと国内での協調的なアドボカシーの組み合わせによって、SEの規模拡大を国の課題として位置づけることに貢献していた、③6カ国すべてが、SEのスケールアップに向けて慎重に調査、計画、管理していた、④6カ国とも利害関係者を特定し、支持者と反対者を潜在的影響力のレベルで分類していた、⑤どの国も、利害関係者をターゲットとし、彼らの支持を取り付け、あるいは彼らの抵抗を克服するために、さまざまな方法を駆使していた。

●口頭発表「性のポジティブで多様性を認めるセクシャリティ教育の課題と進むべき道」マーグリット・デ・ルース氏（ユトレヒト大学、オランダ）ほか

オランダの青少年は、学校で受ける性教育に満足していない。彼らは性のポジティブな面についてもっと学びたいと願っており、より包括的であることを望んでいる。しかし、性の喜び

や同意、セクシュアル/ジェンダーの多様性等の内容を授業で取り扱うことは、一部の生徒や親に抵抗されることがある。

また、本研究の中等教育学校で CSE を指導する教師 23 名（ほぼ生物教師、各校 3～4 名）へのインタビュー（7 回）と、14～18 歳の生徒 37 名へのインタビューの結果では、①CSE をどのように実施するかは、各学校によって大きく異なる、②ほとんどの学校では、教師が授業の準備や実施に使える時間はわずかである、③多くの教師は、授業でデリケートな話題について話すことに不安を感じている、④授業でデリケートな話題について議論しやすくするためには、異なる見解について明確に議論すること、セックスの喜びについて自然に表現すること、生徒にテーマを選ばせるなど積極的な役割を与えること、等が示された。

以上のことから、CSE は教師や学校に依存しないようにすべきであること、国の明確なカリキュラムガイドラインと教師へのサポートが必要であること、対話型 CSE の授業は生物学のカリキュラムの一部になるのではなく、全学年のカリキュラムの中で独立した繰り返し行われるテーマになるべきであることが提言された。

#### ●口頭発表「イタリアにおける包括的セクシュアリティ教育の試行とその結果」アリス・チネリ氏（ピサ大学、イタリア）ほか

CSE は、学校教育で青少年の「性と生殖に関する健康」を促進するための重要な戦略であるが、イタリアの学校カリキュラムには現在、CSE は含まれていない。

本研究では、保健省の助成を受け、2023 年 2 月に示されたイタリアの高等学校における CSE（思春期と健全な人間関係、性的アイデンティティと多様性、性的同意と避妊、性感染症予防と性の保健サービス、生徒が選んだテーマに関する学習）を試行し、予備的に評価した。

主な結果としては、①事前/事後テストにより、知識は 15 項目中 13 項目で有意に向上した、②正答率が大きく向上したのは、HIV/AIDS 治療に関する項目（+41.1%）と STI 症状に関する項目（+37.5%）であり、共感とステレオタイ

プの意味を問う項目では、正答率の向上は見られなかった、③90%の生徒が STI について話すことを「非常に」評価し、72%の生徒が教師以外の大人と話すことを望んだ、等が示された。

以上より、短期的には知識の増加や不確かな知識の減少などの成果が見られた。しかし今後、イタリアの学校カリキュラムに CSE を導入するためには、さらに多くのデータとアドボカシーが必要である。

#### ●シンポジウム「ギリシャにおける包括的セクシュアリティ教育—展望と課題」の「4. 語りにくいことを語る！ セクシュアリティ教育プログラムに対する教師の意見」エレナ・ヴィタラキ氏（クレタ大学、ギリシャ）ほか

ギリシャでは、包括的なセクシュアリティ教育が長年問題となっている。セクシュアリティについて話し合う教師は全体の 3%にも満たず、その原因は不十分な研修、限られた教材、矛盾した教育方針などにある。

本研究では、セクシュアリティ教育介入後の教師の意見と態度を調査する。そのサンプルは、20 人の教育者グループのうち 7 人の幼稚園及び小学校の教師である。彼らは自発的に 20 時間の体系的な研修に参加し、5～8 歳の児童を対象に 15～20 時間のセクシュアリティ教育プログラムを実施した。

主な結果として、①教師たちは、セクシュアリティ教育によって、以前は軽視されていたデリケートな問題に言及できるようになると考えており、またこのような教育は重要かつ革新的であるが、同時に困難でもあると考えていた、②介入後、子供の知識や態度、特に体の部位に関する知識に顕著な変化が示され、また自己認識や自尊心の認識にも変化が見られ信頼関係も構築された、③教師たちは、家庭で性に関する話し合いをする親はほとんどいないと思っていたが、自分たちの介入によって、家庭や学校での良いコミュニケーションのためのツール（きっかけ等）になったことに気づいた、④教師たちは、他の学年でもセクシュアリティ教育を継続していくためには、適切な教材と教師の研修トレーニングが必要であることを強く指摘した。

以上より、セクシュアリティ教育の内容や実施に対する教師の信念や態度、親との連携・協力は、この教育を推進するための重要な要素である。また、教師は指導のための体系的な研修と適切な教材を必要としている。これらのことを教育政策の関係者は十分考慮すべきである。

●シンポジウム「包括的セクシュアリティ教育の支持者としての親」ジャクリーン・ヘンドリックス氏（カーティン大学、オーストラリア）ほか

本研究では、学校における CSE の実施に対する親の態度について、学齢期の子どもを持つオーストラリアの親（全国代表サンプル数 2,427 人、うち女性 56.5%）を対象にオンライン調査を行った。調査項目は、学校での CSE 実施に対する態度と CSE のトピック（40 項目）に対する支持、子どもとセクシュアリティについて話し合うことの抵抗感やその頻度であった。

その結果、①90%の親が学校での CSE を支持していたが、宗教を重要視する親は支持的ではなかった。②性的指向（88.8%）、自慰行為（86.8%）、性自認（85.8%）、性の喜び（83.5%）など、一般的に論争的になると考えられているトピックでさえも、支持された。③セクシュアリティについて子供に話すことに抵抗がない親は 69%であったが、話し合いの場は限られていた（56%）。④20%の親は、セクシュアリティについて、まったく話していなかった。

以上より、①オーストラリアの親は、学校を基盤とした CSE に強い支持を示しているが、性別（女性>男性）、政治的信条（オーストラリア労働党支持者は最も支持的）、宗教によって顕

著な違いがある。また、教育者としての親たちの役割は限定的である。これらの知見は、継続的なアドボカシー活動が必要であることと、一般的に誇張されがちな親の反対意見に疑問を投げかけるものである。②予備的な分析結果から、学校は親の考え方の多様性を認めるべきであり、反対意見も存在する一方で、大多数の親は CSE を重視し、この分野での支援を望んでいることが示唆された。学校は、学校全体のアプローチの一環として、CSE に関して親とコミュニケーションをとり、親を取り込む必要がある。③CSE の特定のトピックの中には、信仰に基づく状況では困難なものもある。少数派の宗教的見解が尊重されつつも、それがすべての生徒に提供される CSE に不当な影響を与えないようにするためには、このような相互作用についてさらに検討する必要がある。④CSE プログラムを成功させるには、親やその他の家族の積極的な関与と支援が不可欠である。CSE の実施に学校が親を効果的に関与させる方法や、親の反対意見に対処し克服するための方策について、親の参画を成功させた国から学ぶことが期待される。

最後に、今大会で報告された国・地域における CSE の推進上の課題や困難は、日本に共通する部分も少なくないと予想されました。一方で、日本の学校教育の制度や性教育の在り方、それを取り巻く環境を改めて見直すことによって、諸外国・地域が直面する課題や困難を打開するための鍵が見つかる可能性があるとも感じました。

